学生座談会「コロナ禍は、学生の文献収集活動にどう影響を与えたか？次世代の調査研究環境のあり方を考える」

上山敦史（駒澤大学大学院）・鬼塚勇斗（鹿児島大学大学院）・
高田祐一（奈良文化財研究所）・武内樹治（立命館大学大学院）・
津田富夢（駒澤大学大学院）・野口淳（金沢大学古代文明・文化資源学研究所）・
林亮太（立命館大学大学院）・溝口泰久（京都府立大学大学院）

Student Roundtable: How Did the COVID-19 Pandemic Affect Students' Literature Collection Activities?

Thinking about the Future of Research Environments

Hayashi Ryota（Ritsumeikan University Graduate School）
Mizoguchi Yasuhisa（Kyoto Prefectural University Graduate School）
Noguchi Atsushi（Institute of Studies for Ancient Civilization and Cultural Resources）
Onitsuka Hayato（Kagoshima University Graduate School）
Takata Yuichi（Nara National Research Institute for Cultural Properties）
Takeuchi Mikiharu（Ritsumeikan University Graduate School）
Tsuda Tomu（Komazawa University Graduate School）
Ueyama Atsushi（Komazawa University Graduate School）

・文献収集／Literature survey・学生／Students・調査研究環境／Research environment
・コロナ禍／COVID-19 pandemic

趣旨

2019年末から新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行が始まった。新型コロナウイルスワクチンが普及する前の2020年ごろは、大学授業が全面オンラインとなり、大学入構禁止・図書館も利用できないといった事態になった。当時の大学３・４回の学生は、卒業論文やゼミ発表のための文献収集に支障をきたし、テーマ自体を変更したといったケースがあり、全国遺跡報告総覧などインターネット上で入手できる文献で調査研究したと聞く。またコロナ禍という外部環境の変化は、調査研究環境に影響し、文献収集方法や研究手法にも影響を与えた可能性がある。そこで、当時影響が大きかったと思われる修士院生（2022年時点）にオンラインで集まってもらい座談会を企図した。2020年時の状況について、学生本人らの経験を記録化するとともに、今後の調査研究環境をよりよくしていくための基礎資料としたい。

2022年9月30日10時、オンラインで開催した。

高田　奈良文化財研究所の高田と申します。

今日の流れですけれども、まず簡単な自己紹介をしていただき、そのあと、新型コロナウイルス感染拡大による社会や大学の変化について2019年、2020年の流れをざっと復習します。そして、皆さんにそ

れぞれ書いてきていただいたアンケートをもとに、5分くらい各自のコロナ禍での研究活動についてご紹介いただけたらと思います。その中でポイントになるような点がいくつかあると思いますので、それについて後ほどディスカッションできればと思っています。

特にストーリーとか筋書きというのは特に考えていません。みなさんと議論した内容から発展させていきたいと思っていますので、予定調和的なこととか、答えを見据えたこととか、そういったことは一切気にせずに発言いただければと思います。

では、まず自己紹介しましょう。

奈良文化財研究所の高田と申します。仕事としては、全国遺跡報告総覧[1)]（以下、遺跡総覧）やWebGISを運営したり、文化財担当者向け自治体の研修などもやっております。今日はよろしくお願いいたします。

今日はオブザーバーとして、立命館大学のドクターの武内くんにも来ていただいています。あとは野口さんも来ていただいています。では、野口さん、その次に武内くん、自己紹介をお願いします。

野口　金沢大学の野口と申します。実は今、ホンジュラスという国にきておりまして、文化遺産の3D計測の研修をやっております。あとは、高田さんと一緒に考古学データのオープン化ということを進めてきて、今日のテーマに非常に関わるということで、オブザーバーで参加させていただいております。よろしくお願いします。

武内　立命館大学文学研究科博士課程後期課程1年の武内と申します。私は、学部が徳島大学で修士から立命館大学に来て研究を行っております。研究テーマとしましては、考古資料などがデジタル化されたことによって、可能となる次の研究です。たとえば報告書のテキストの分析だったり、データサイエンス的な情報処理や位置情報を使った研究をやっていて、最近はオープンサイエンスの研究もしています。

鬼塚　現在、鹿児島大学大学院人間環境文化論専攻の修士1年目の鬼塚と申します。学部時代は高知大学で卒論を書きまして、大学院でも引き続き、中世須恵器の研究をしております。フィールドとしては、九州をずっとやっているという状況です。

林　立命館大学修士2回生の考古学・文化遺産専修の林亮太と申します。学部のときは、立命館大学でそのまま上がらせてもらっています。卒論は、縄文時代の翡翠製大珠という、翡翠のアクセサリーを使った縄文時代の在り方を研究しておりまして、現在の修士論文もその引き続きということで、やっています。

溝口　京都府立大学大学院文学研究科史学専攻修士2回生の溝口と申します。学部も、京都府立大学でそのまま上がってきたという形になっています。卒論では、7世紀後半から8世紀の初頭あたりの畿内の重弁蓮華文と呼ばれる文様の軒丸瓦の研究していました。今は、少しフィールドを変えて、8世紀の宮都の瓦生産を恭仁宮という8世紀の聖武天皇の頃の時代の宮都を切り口にして研究しています。

津田　駒澤大学修士課程2年の津田富夢と申します。学部は駒澤大学でそのまま上に上がらせていただきました。私は2019年に3年生、2020年は4年生でした。卒業論文では、私の出身が山形県ですので、山形県の9世紀初頭の造瓦組織について取り組んでいました。県内の各窯の工人規模ですとか、生産体制の復元。そういった研究を行っていました。現在は、それを発展させて、時代は8世紀末から9世紀後半、エリアは、佐渡・陸奥・そして関東地方に拡げて、そこで各窯の工人規模を確立したうえでその技術動態を追う研究を行っております。

私自身、このコロナ禍の大変だった2020年が4年生で、卒業論文執筆の際には資料取集に苦労したので、皆さんとそういったお話を共有させていただければな、また、意見交換できたらなと思っています。

上山　同じく駒澤大学大学院の修士課程2年に在学している上山敦史と申します。学部も同じく駒澤でそのまま上がった形になっています。卒論の内容としては、東アジアの木槨をやっておりまして、修論

ではちょっとテーマを変えて、方形周溝墓と住居の関わりについて研究をしています。今日はいろんな地域の大学の方がいらっしゃるので、有意義な討論ができたらいいなと思っております。

コロナ禍による社会や大学の変化

高田　まずは2019年から遡って、コロナ禍による社会や大学の変化について復習したいと思います。

まず発端として、公式的な発表としては2019年の12月に、中国の武漢市において新型コロナウイルスの感染症が確認されました。次に年明けの１月に日本国内で初の感染者が確認され、その末には、WHOでも緊急事態宣言が出ました。ちょうど横浜に来ていたクルーズ船の「ダイヤモンド・プリンセス号」がテレビ等で毎日ニュースを賑わせていたのは記憶にあるかと思います。

2月13日には、政府が「新型コロナウイルス感染症に関する緊急対応策」という政策を決定して、水際対策とか感染対策とかで予算投入し、実行していくことで、政府も本格的に動き出しました。その中で、2月の後半になってきますと、小学校の一斉休校を当時の安倍首相が発表し、学校の一斉休校が3月2日から始まるというところは記憶にあろうかと思います。さらに政府は法律として、「新型インフルエンザ等対策特別措置法」を改正して、特措法の適用対象に加えました。この頃になりますと、世界的に新型コロナウイルスが広まっておりまして、WHOもパンデミックを宣言しました。

3月に改正された特措法に基づいて、政府は4月7日に緊急事態宣言を発出するわけです。それを受けて行政としても学校を閉鎖していくというふうに変わっていきます。大学によってはこのあたりの経緯をホームページで公開していましたが、過去の情報が閲覧できなくなっているところもありましたので、今回は過去の経緯がすべて残っていた立命館大学を参考にします。

立命館大学では、4月7日にホームページで措置を発表して、4月8日から5月6日までを入構禁止にします。しかし、収束しなかったため、さらに7日から31日まで延長したというところです。大学がホームページで公開して、対応が指示されていたと思います。授業につきましても、2020年の春学期についてはほとんどオンラインになっていたかと思います。私も大学の非常勤講師をやっているのですが、完全オンラインになっておりました。

5月25日に緊急事態宣言が解除されて、場合によってはオンラインと対面が並行されていったというふうに思います。おそらく、ワクチンなども出てくると割と行動規制も緩和されたと思います。

コロナ禍で一番ひどかったのが、この2020年の春学期中ですね、3月から6月、7月ぐらいかなと思います。そのため今回は2020年にターゲットを絞って、議論できればと思っています。

参加学生の自己紹介とコロナ禍での研究環境

ここから、論点になるところを見つけていきたいと思いますので、簡単に事前アンケートに記載いただいたことをご紹介いただければと思います。

上山　大学の状況も先ほどお話しいただいたように、5月ぐらいまでは基本的に授業が何もなかったような気がします。記憶が曖昧なところもありますが、授業が再開されても全部オンライン授業で、基本的には自宅で受けたりしていたと思います。

後期から対面のゼミが始まりましたが、1週間ごとにオンラインと対面の繰り返しで進んでいました。

その他にも、大学がオンライン授業のあとに対面授業がある学生向けに空き教場をいくつか開放してくれたりしていて、対面授業とオンライン授業を両方出席できる措置をやってくれたりしていました。

調査活動の影響に関して、私は遺構の研究をしていて、その中でも木槨についてやっています。資料調査が必要になってくるようなものではなかったので、あまり影響はなかったのかなというふうに思っています。ですが、それ以外でやっぱり図書館に行こうとか博物館に行こうとかいうところに対し、躊

躇するようなことはありました。

その後、図書館に入れるようになっても、午前中9時から12時と、1時から3時とか4時とか時間制限がされていて、図書館もスタッフを削減していたりして、閉架図書がなかなか出てこないとか、時間切れで図書館を出ざるを得ないこともよくありました。

その反面、遠方で行われている学会や、海外で行われている学会がオンラインになったことで、参加の敷居はすごく低くなりました。プラスのこともあったのかなと思っています。

資料の収集に関しては、遺跡総覧ももちろん使っていましたし、あとはJ-StageとかGoogle ScholarとかPDFを公開されているものとかを見て資料を集めたりしていましたし、また中国のものだったらCNKI[2)]っていう遺跡総覧に似たようなものを見て、いろいろ論文や資料を探しました。Amazonなどを見て安いものがあれば買ったりもしていました。

次に文献収集の方法に関して、あんまり変わったなという感じはしていませんが、取り寄せとかコピーしたものを送ってもらうって形を、多少お金は使ってしまいますが、自分が動かない方法で、リスクを下げる方法で収集するように変化したかなという気がします。

最後に要望と自由意見が混ざっていますが、やっぱり他の方も書いているように、遺跡総覧で閲覧できる報告書の量とかに自治体によってばらつきが多いなというのが正直ずっと感じていました。CNKIだったら、様々な学術分野に横断したものになっていますし、考古学も理化学年代なども盛んになってきていますので、様々な分野に横断したものがあれば、よりいろんな人がアクセスしやすいものになるのかなとも思いました。また国会図書館の納本制度とか連携すれば、よりスピーディーに、ただ調整とか増えてすぐにできるわけではないとは思うんですけど、効率よく資料の収集ができるんじゃないかなと思いました。

津田　私も大学は上山さんと同じですので、大学の状況についてはほとんど同じになりますので、ここは割愛させていただきます。

新型コロナによる調査活動研究の影響については、4月から10月くらい、9月中旬ぐらいまでですかね、図書館や博物館がほとんど開いていなくて、図書を手に取ることも、資料を見に行くこともできない状態で、これまで集めた資料を見返すことぐらいしかできませんでした。

また、駒澤大学は、図書館よりも考古学研究室に報告書が多く収蔵されていますが、そこは考古学研究室を使うことが、先生の許可云々ではなく、大学の施設じゃないから使用不可となっていて、資料収集については大変苦労しました。

その他にも、私自身資料観察が主となる研究をしていましたので、資料調査に行くことができないといった影響がありました。

そのあと、9月下旬ぐらいから徐々に公共施設が再開し始めたので、地方に出向くことがありました。公共施設の立入が抽選、また時間制限があるということ以外の影響は私は受けなかったという印象です。

続いてコロナウイルスによって発生した影響にどうやって対応したのかというところですが、報告書の資料収集は、奈文研の遺跡総覧を活用しました。遺跡総覧にない資料は図書館が開くまでフリマサイトですとか、ネットオークションで探して購入したり、落札して手に入れていました。そこから、9月下旬になって、先ほど話したように公共施設が開き始めたので、主に国会図書館を利用して手に入れていました。いつもは必要箇所のコピー取るだけでしたので、フリマアプリ等の購入代金などを考えると、コロナウイルスが流行していなければ、資料収集に関わる費用を抑えられたなと。そこはとても感じています。

調査環境、研究環境についてコロナが発生する前と後で文献収集の方法は変わったかというところは、コロナ前は大学の研究室書庫を探し回ったり、国会図書館や明治大学の博物館附属図書館にはかなり多くの蔵書がありますので、そこに行って探し回ったりしていました。私はコロナが流行してから

大学院に進学したんですけど、院進後は、多少お金がかかりますが、図書貸借サービスですとか、そういった方法をとるようになりました。最近、それが多くなっていると感じています。

要望については、自治体によってPDFを閲覧できるところと、抄録のみだけというところがあって、できれば今後、全ての自治体・研究機関の報告書を閲覧できるようになれば嬉しいなと考えています。図版作成のために最後は紙媒体の報告書からスキャン取りますので、そのまえにPDFなりで確認したい。申請したときに、あれ、これ思っていたのと違う、遺跡総覧の抄録をみたら瓦とあって、本を取り寄せたら、瓦全然載っていなかったという経験がありました。収集に関わるロスが少なくしたいので、このあたりはぜひお願いしたいなと思っております。

自由意見については、資料収集に関わるところで、大学とか機関で持っている本が結構バラバラで、国立国会図書館では見れなかったのに、なぜか明治大学で見ることができたとか、そういうところでやっぱりそこは奈文研の遺跡総覧で全部見られるようにしてくれると便利だなと感じます。

溝口　私は、まずコロナの広がりというのを感じたところとして、2020年3月の頭に古墳の測量調査とかをやっておりましたが、急に打ち切りになったことです。それが卒論の直前になったりして大変でした。そして3月の途中ぐらいから学内立入禁止になって、そこからしばらく立ち入りが全然できないっていう形でした。5月（ゴールデンウイーク明け）頃くらいから、授業が再開し研究が目的という名目で、教員の許可を得て、研究室の滞在が可能になってきました。

授業は、前期の間はずっとオンラインという状況でしたが、ゼミ、私の大学は小さい大学で、ゼミ生が10人いるかいないか程度なので早いうちからハイブリットで、オンラインと対面併用に前期のうちからなっていたような覚えがあります。

図書館とか、附属図書館については、府立の大学ということもありまして、隣接している府立の別の公文書館があって、その中に文学部も入っていて図書館も入っているというようなちょっと特殊な感じです。大学とはちょっと違う府立の施設ということで、図書館が休館になったら、附属図書館も休館になってしまうという状況でした。ただそのあたりは、結構早く対応してくれて、早くから、大学・学内者であれば、附属図書館は使用可能という形になっていたような覚えがあります。

影響というところでは、今申したような図書館の休館によって、資料収集が大変になったっていうところですが、そもそも私の大学ではあまり所蔵資料・収蔵している本が多くないので、普段から近隣の大学であったり、関西では奈良大学に行くことが多いかなと思います。そういった蔵書の豊富な大学図書館での利用が難しくなってきたということがあり、結構資料収集では困難が生じたと思います。

あとは、ちょうど卒論の時期に差し掛かっていたので、いろいろと図面を作るなどの作業も始めていたところです。やはりAdobeのIllustrator等について当時は自分で契約していなかったので、大学の設備に頼るところが多かったんですけれども、研究室の利用が制限されていたことで、そういった設備の利用や研究室自体の利用制限で、研究への弊害になったかなと感じました。

その状況にどうやって対応したかといいますと、やはり皆さんおっしゃったように、遺跡総覧であったり、CiNii[3]などオープンに公開されているPDFなどを使用するという形になっていました。古いちょっと昔のものだったりすると、国立国会図書館のデジタルコレクションとかで公開されていたので、それを図書館に複写を依頼するというようなことをしていたと思います。

コロナの発生前後で、文献収集の方法が変わったかについて、文献収集自体ではないですが、PDF化された文献に頼ることが多かったっていうことがコロナ以降にあって、その延長でデータの管理というところも私の中では変わりました。手元に実際書籍としてあるものも、PDFにしてデータをしっかり残

す。データ化することを意識するようになったような気がします。

要望に関して、各自治体や財団のほうで発行している報告書というものはPDF化が結構進んでいるような気がしますが、同じような機関で発行している紀要などは、あまり流通していないところもあって、入手が困難なうえPDFにもあまりなっておらず、入手が難しいので、様々な形で公開されるようになったらいいなと思いました。

自由意見ですが、大学間で利用できる蔵書に差があるということで、そういったことが今後解消されていくのかなというのがすごく気になっていて、やはり著作権の問題であるとかかなりハードルが高いところがあると思いますが、格差がないような形になっていけば、研究の進展にもつながっていくのと感じています。

林　先ほどのコロナ禍での大学の対応として紹介いただきました通り、立命館大学は他の大学の状況と同じように5月ぐらいまでは、一切の立入を禁じられているような形でした。そのあとは、のちに大学自体で基準を定めていまして、5月以降、その基準が下がった時にじゃあ来ていいよという感じで、受け入れをしている状態で、その間に研究室などは入ることができる状態でした。私自身はその中で活動をしていくような形でした。皆さんの話を聞いていると、立命館は割と制限がゆるやかになるのが早かったのかなと思っています。

図書館の利用は、やはりかなり制限されていまして、学内の図書館は入れずに文献などを図書館に申し込むときは、その大学自体が図書館のほうからサービスとして郵送してくれるというような対応はしてくれましたね。そのおかげで下宿にいるときでも見たい文献を見ることはできました。秋学期になるとかなり立入が緩和されていて、図書館も利用できるような形でした。やはりそういった中で、周りの大学の図書館を使いたいというのは必ずしも出てきますが、私立大学は緊急事態宣言が出て1年間は、どこも大学外部の人が入れなかったと思います。その中でも、京都大学や奈良文化財研究所の図書室は外部の公開も利用者制限を設けて、かなり早い時に公開してくれたので、私自身遺物で論文を書いていたので、その点かなり助かりました。

研究への影響ということで、大学図書館に収蔵されていない図書を閲覧することは実質不可能になった期間が1ヵ月強あったと思います。その期間は資料を集めるということは無理でしたので、それまで集めていた研究史などを振り返って何かできないかなというような形で、対応していたと記憶しています。

また、資料調査はしたいので申請はしますが、やはりその時期はかなり断られていました。また、都市部から学生が行くとなると、地方の機関では、状況的に積極的な対応ではない場合がありました。

あと、実物を観察できない状況があったので、研究の内容もやはり報告書で確認できる事項、例えば遺物の長さだったり重さだったり、そういった数値に置き換えられるものを元に研究を進めるほかなかったため、研究方法の変更にも影響があったのかなと思っております。結局、資料調査は行わなかったという形になりまして、順次、大学外部の人を受け入れできる図書館などを探しては、なにか閲覧しにいくというような形でした。

調査研究環境について、文献収集の方法は本質的には今とあまり変わらないと思っております。　外部から収集するということで、遠い図書館や近い図書館でも結構費用が掛かりました。私自身バイトもやはりシフトが少なくなっていたので、そういったところで、ちょっと生活も苦しいということがありました。

要望に関しましては、遺跡総覧の利用は高まっているなと思います。その中で、研究内容の「大珠」とキーワードをいれて検索すると、おそらく報告書の抄録のページから関連するものが出てくるんだと思いますが、抄録の内容に出土した遺物の概要欄が自治体によって書き方もバラバラですし、ある自治体は遺構しか書かなかったり、ある自治体は遺構も遺物も丁寧に書いているということがあったので、抄

録の記載事項を統一してもらえると、キーワードで検索したときに、かなり効率的に探せるかなと思っております。

自由意見としては、奈良文化財研究所や京都大学の図書館が比較的早く開いてくれたおかげで、論文が書けたと思っています。そういった研究をする上での資料を保存、保管している施設というものがやはり開かれてなければ、研究ができないんだなということを痛感する期間だったなと思っております。

鬼塚　研究テーマは冒頭でもお話したとおり、中世須恵器と、中世の頃に作られていた須恵器系の陶器類になります。自分の出身である宮崎県が、中世には九州の中でどういった状況であったのかということに興味があったという感じです。以前は文献史の方でずっと中世の歴史を研究したいと思っていたので、3年生から考古学のゼミに参加するようになり、いきなり飛び込むような形で資料収集もしてきました。そういった意味でも、他の皆さんと比べるとだいぶスタートも遅かったのかなという気はします。

そういった自分の状況を踏まえた上で、その大学の状況を見ていますと、2回生の12月頃から対面授業がやはり減少し始めて、それで年が明けて3年生の前期に移ると、ゼミの指導も基本オンラインで、大学からの通達では9月30日までは集中講義も含めて、基本的にオンラインで実施するようにという状況でした。図書館も、基本的に利用できないという状況で、3回生の前期の間は資料の調査にも行けない、図書館で文献を読むこともできないという状況が続きました。

当時、自分が宮崎に帰省している最中に、他県をまたいでの移動等も制限されたということもあり、オンラインで対応してくれた点は嬉しかったです。しかし、実際実家にいながら、じゃあ果たして文献が読めるのかというと、やはりかなり制限されており、自分で取り寄せられる分は、先ほど多くの方々がおっしゃっていましたが、奈文研の遺跡総覧を利用する、もしくは自分でAmazon等のオンラインショップでも購入するなどで対応するという状況が続いていました。

そういった大学の制限が解除され始めたのが、だいたい10月頃からでしたが、そこからも何度か大学内でクラスターが発生するたびに、入構制限がかかり、結局図書館の利用もそれに合わせて、利用できなくなる、実習室等に置いてある文献等も利用できないという状況が、断続的にありました。そういった観点からすると、本格的に研究、資料調査も含めて研究らしい研究ができるようになったのは4回生の夏ごろからだったかなという状況です。

調査研究の環境について、コロナが発生する前と後で文献収集の方法が変わったかといいますと、基本的に変わらなかったというのが正直なところです。ただ自分が実家にいたということもあったので、本来は図書館に届いて自分が受け取るはずの文献を、さらに宮崎にまで転送してもらうなど、余計な費用がかかってしまったなという点では変化はあったかなと思います。

要望としましては、大学の収蔵図書・報告書には限界があります。そのため大量の資料を取り寄せるために、自分が奨学金の多くをつぎ込んで、郵送費用等も負担することも多かったです。取り寄せ先の大学としては、やはり関西圏の京都大学や奈良大学の大学図書館、もしくは九州大学、熊本大学等の大学図書館から取り寄せることが多かったというふうに記憶しております。

そういった観点からも、繰り返しになってしまいますが、遺跡総覧の報告書の充実、ようするにPDF化された報告書の充実ってものが非常に重要なものではないかと考えております。

最後に自由意見ですが、郵送費用の具体的な金額は、最低でもやはり往復で1000円はかかるという状況です。やはり土器陶器研究となりますと、各遺跡で出土している遺物を集める以上、取り寄せる報告書の数もだいぶ多くなってしまうので、それが何十冊となってくると、やはり学生にとっての経済的負担は結構大きかったという印象です。

私も現在鹿児島大学にいるという状況で、資料自

体は近場でなんとか手に入る環境にこそ今はなっていますが、以前の高知大学の状況を踏まえると、地方大学であればあるほどやはり資料をどこから取り寄せるかによって経済的負担がある、もしくは報告書の取り寄せる環境によっても制限されるという状況があります。そこで、やはり遺跡総覧もしくはそのほかの CiNii、NDL、国立国会図書館のデジタルアーカイブの利用にもかかってきますが、そういったオンラインサービスの充実しているところが、やはり地方国公立大学だけに限らず私立も含めて生命線になってくるのではないかという状況です。

野口　一通り個々の状況はわかりましたので、一旦それぞれ、今回のコロナで制限がかかる前と後で何が一番変わったかっていうところを１点か２点あげてもらって、それについてまた集中的に、他の人は、私はこうでしたってみたいなのをやってもらったらどうでしょうか。

コロナ禍によって最も変化した点

高田　それではコロナ禍によって何が変わったかっていう点に限定して話し合いましょう。

おそらくコロナの発生によって、いろいろと社会に影響があったところです。皆さんに全く責任はありませんが、たまたまこの時期に卒論書いたりとか研究の一番若い時にコアになる時間を、この環境で過ごされた。おそらく変化点に立ち会っているだろうと思っています。ですので、そのあたりの何が変わったかっていうところにターゲットを絞ってお願いします。

上山　何が変わったかっていうところで、強く感じたのが、出来る限り自分が出歩かなくなったっていうところがひとつあるなと思いました。僕とか津田さんは大学が都心にあって、私は実家住みですので、通学の際に渋谷とかそういうところを経由しますので、当然感染のリスクというのが増えてきてしまいます。それに、もし感染すると周りの家族とかにもすごく迷惑かけてしまうので、本は必要だけれども、多少郵送費がかかっても家に届けてもらえるのであれば、そっちを選択するというような感じで、とりあえずリスクを下げるために家から出ないようにしていたかなというところが、まずひとつあります。また、今日ここの博物館に行ってみようって気軽に外出はしなくなったというのもあります。私はカメラも好きなんですけれども、そもそもカメラを街中で取り出すことにも躊躇するようになってしまったというところで、ひとつ変わったところがあるのかなっていうふうに感じております。

津田　私もやっぱり大きく変わったのは資料収集、特に本の集め方で、私も上山さんと同じように、できるだけあまり外に出ない集め方、その代わりお金はかかるけど、自分からウロウロしなくていいやり方を確かにとるようになり、そっちがメインになっているというのは感じています。

資料収集以外では、例えば私自身資料を観察しないといけない研究をやっているので、いつもだったら小出しで調査をお願いして行っていましたが、ドカッとまとめて行くようにしていたりとか、その調査前には、あまり出歩かない、飲食店等には行かないなど自分なりのルールを決めてやっていました。いろいろ研究や資料収集する上でだいぶ自分に縛りを設けたなっていうのが、コロナ前後で私が感じる変化かなっていうふうには感じています。

溝口　私は京都市に住んでおり、研究テーマには近隣の遺物を取り扱っていましたので、比較的早い段階から制限を設けない機関への資料調査へ行けたり、文献集めるにしても比較的手に入りやすかったのではないかなって思っています。あまりコロナ前後で、実感した違いというのは、資料収集にはないですが、それでもやっぱり研究会とかそういうところの変化は、すごく私の中では大きいです。研究会がオンラインで実施されるようになったっていうのは、参加自体の敷居が低くなって、いろんなものに興味をもって参加できるようになったのはすごく良い点です。しかし、特に自分がメインで研究している瓦の研究会に行ったりして、自分よりも年代が上のいろんな研究者の方々と、コンタクトをとれる機

会がなくなってしまったっていうのが、私の中ですごく残念なことで、オンラインが普及したことでひとつデメリットという面があるのかなというふうに感じています。

林　私としましては、先ほど申したように、研究の方針が報告書で確認できることに限られるということが大きかったのかなと思います。というのもやはり、アクセサリーなどの装身具のことについて研究していたので、見栄えというか、そういう認識論的なところから何か書きたいなと思っていた時がありまして、そういった時に色合や質感、あと重量といったものは、意外と報告書で書かれていない場合が多い。それを実物を見てやりたいなと思っていましたができなかったので、報告書で確認できることに限って研究を進めるっていうのが、一つ大きな違いになったのかなと思います。

コロナになった時の問題というか、やはり経済的に収入がなかったので、外部から図書館に閲覧を申し込んで届けてもらう時にかかる費用と、奈文研とかの図書室に行く費用をくらべて、あっこれは奈文研の方が安いぞってなった時に、奈文研に電車で借りに行くという、ちょっとリスクを冒すような場面があったので、そういった経済的か安全にいくべきかっていう葛藤はありました。

鬼塚　コロナ前と後で、どこが一番変わったかっていうところですが、自分としては２点ほど挙げられるかなと思います。

１つ目は、自分が研究、卒論を書いていくなかで図版を作る際、やはり図版に用いる実測図や、遺跡の配置図を編集する上で、大学に入構制限がかかっている以上は、資料をそもそも受け取れない。パソコン等で編集する際も、どうしても自前のノートパソコンとかでは限界があるので、据え置きの、主に実習室のパソコンを使うことが多かったのですが、それすらもできないという状況になったのが非常に大きかった。そのため図版の作成もだいぶ遅れてしまったっていうところが大きかったかなと思います。

２つ目は、先ほど発表してくださった林さんの発言にもちょっと関わる部分があるかもしれないですが、やはりコロナが発生する前の状況ですと、実際に資料を見に行くという状況であったりとか、報告書だけではわからない情報がやはりあるわけです。それを実際見に行くという実見調査というものも制限されて、それに合わせて卒論の作成が遅れるという状況がありました。自分が見に行くべき地域も、九州の中でも、やはり資料数の多い福岡・熊本・鹿児島が主なフィールドでしたが、そこの感染者数が爆発的に増えた時期もありましたので、そういった感染者が増大している地域に実見調査に行くのは、やはり憚られると。そういう点で大きな変化があったかなと思います。

高田　だいたい皆さんのアウトプットが出たと思っています。その中でこれまでの皆さんの発言と、事前のアンケートから、おそらくコロナ禍での研究活動について、４つの点に整理できるかなというふうに思います。

１つ目が、データ管理の方法が変わったことや、データアクセスの能力に課題があるという面ですね。例えば大学教育としてそのあたりをどうするかっていうのがあろうかと思います。データ管理とかデータアクセスに関する部分についての課題が1つ目。

2つ目が、おそらく研究方法自体が少し変わった部分と変わらなかった部分があるかと思いますが、本の場合、実物が見られなくて、数量や数値の部分でアプローチするというのに変わったということがあったかと思います。そのような研究方法が変わったことについてが、2つ目。

3つ目が、物とか本など資料を管理している施設の社会的使命として開かれていないといけないと意見がありました。そういった社会的使命の部分についての話題が3つ目です。

最後4つ目が、現在の資料収集の課題ですね。例えば本の取り寄せ方。コロナのような感染症が流行っているときに経済的な面を優先するのか、安全面を優先させるのか、あとは大学によって図書館の本の収蔵率や充実度が違うとかそういった部分の現在の

資料収集の課題というのが4つ目の課題として明らかになったのかなと思います。

ここからこの4点について、掘り下げていきたいと思います。

論点

●データアクセス・データ管理とその教育
●研究方法の変化
●資料管理施設の社会的使命
●コロナ禍での資料収集の課題

論点：データアクセス・データ管理とその教育

高田　データ管理の方法が変わったことや、データアクセスの能力が今後必要という話題があったと思います。大学で、データアクセスやデータ管理の方法について触れられたことはありますか。

鬼塚　データアクセスは、主に遺跡総覧と国立国会図書館の2種類をまず紹介されました。それから自分の研究に関連する論文をCiNii等で調べて、必要に応じて取り寄せるっていう、そういった指導はありました。

上山　私は、先輩と話したりしている中で、奈文研の遺跡総覧があるから見るといいよっていうような形で知りました。指導教員の先生からはGoogle Scholarの存在は教えていただきました。そして、個人的にデータ管理としてはiPadをずっと利用しておりまして、やっぱり携帯だと小さくて読めないですし、パソコンだとキーボードが邪魔で読みづらいので、比較的紙の縦横の比率と近いiPadを使って、PDFで上がっている論文は見たりもしています。

溝口　CiNiiなどは割と低い回生の時に情報処理関係の授業の時に習ったようなものの延長線で、そこからはあと先輩とか人の話を聞くなかで、覚えていったかなというところがありますね。

林　私自身も、低い回生の時にそういった情報処理関係の授業でCiNiiだったり、データベース関係のサイトを教えてもらいました。ただ、データ管理については上山さんの言ったようなiPadではないのですが、報告書はやはり紙の媒体でそこからパソコンの画面に合わないだったり、スマホの画面に合わない比率で表示されます。そのため、サブディスプレイをノートパソコンの横にいつも置いて見ていますね。どうしても紙の比率と他のデバイスの比率が合うといいなとは思ったりはしますね。

高田　これはなかなか、核心つく発言ですね。

鬼塚　基本編集等はパソコンでIllustratorやPhotoshopで作るようにっていう指導が基本でした。

鹿児島大学では、現在は3D測定も含めてタブレットを積極的に利用するっていう状況なので、今後は国公立であったりとか、そういった環境でも積極利用はしていくし、そういう時代なのかなというふうな印象を受けましたね。

高田　野口さん、大学によって、教育内容とかデジタル化とかバラツキあるものですか？

野口　はい。もうそのあたりは、全く標準化されていないです。大学というか教員単位かもしれないですね。ちょうど2020年に、私も大学で一コマ非常勤を持っていて、最初のシラバスではオンラインの、遺跡総覧等で検索できるものと、それから大学の図書室のものを併用して調べるというゼミと実習を組み合わせた形式のものでした。それが開講直前にオンラインのみとなって、急遽どのくらい、オンラインのデータソースを知っているかってアンケートをとりましたが、結果は、国会図書館は知っていてNDLサーチは使ったことあるけれども、遺跡総覧を知っていたのは半分くらいでしたし、CiNiiについては全然知らなかったという学生も結構いました。各種のデータベース、その時点で公開されていたデータベースについてもあまり知られていなくて、要は基本は印刷物としての図書を調べるということがずっと続いてきたのだなというようなところがあったかと思います。

高田　ちょっと私の意見ですが、もう皆さん、インターネットで物買ったり、調べるというのが当たり前になっていると思います。うまくネットで情報検

索できると、良いものを安く買える。ネットショッピングと同じで、やっぱり考古学の情報を調べる時のデジタル情報の探し方のスキルひとつで、結果のアウトプットがかなり変わってくるんですよね。というのは遺跡総覧もかなり癖があって、結構都道府県ごとに情報の濃度が違ったりとか、言葉の使い方も違ったりとか、かなり地域によって癖があって、実はそういうのを知っとかないと思った結果が出せないっていうのもあります。ですので、そのあたりのリテラシーを高めていかないとなかなか研究のアウトプットとして、差が出ちゃうのかなというのはあります。ですので、やはり教育として、紙前提の教育ではなくて、デジタルでの情報の探し方はやってほしいというのは個人的には思います。

報告書がPDFでデジタルになっているものについて、タブレットとかiPadで見るときに見にくいっていうのは正にその通りで、PDFは紙のものをそのままレイアウトをデジタルにしたもので、紙で見るものが本来ですよね。それをデジタルで見るっていうのは副次的にあまり本来の使い方ではない。ですので、そうであればデジタルの報告書、デジタルの情報をデジタルの媒体でどうやって見るのがいいのか、という話です。このメディアや媒体の話は本質的な部分ですね。

論点：研究方法の変化

高田　研究方法自体が変わる部分もあったというふうに、アンケートにもありました。これは、林さんですね。資料の数値情報を元に研究を進めるにあたって、統計学を学ぶ必要を感じたというふうにあったと思います。このあたりもう少し掘り下げて林さんのほうで話していただけますか。

林　やはり、形態的なところを見ようとしても、実測図で書いてある資料を平面的にあらゆる角度から見た図面を見ても、どうしても立体的な形が、ここがこう対応しているっていうのが想像しにくかったり、確認しにくかったりするところがあります。そういった微妙な違いから、型式学とか編年を組もうってなるとどうしても無理が生じたり、客観性に乏しいようなものができあがっちゃうなと思います。先ほどいった認識論的に論を進めるとなると、色合いを報告書でカラーで載せている場合はいいですが、そういったものがないのが大半だと思うので、全長だったり、幅、厚さ、重さなどの数値情報、そして何か特徴的なものがどこに付いているかだったり、その分布論で卒論を書いきました。そういった数値の情報の特徴と分布と時期というような形で、それを主に用いて卒論を書いていた中で、数値としてはやはり全長に何か傾向がないかなと思い、例えばヒストグラムを作ったりしました。しかし、ヒストグラムを作るにしてもやはりその統計的な知識が必要だということを、4回生の時には知らなかったです。修士1回生の時に統計学概論という授業を取って、ヒストグラムの注意点などを知りました。そのため、いろいろ後悔しているということがあったので、今回アンケートに書かせてもらいました。

高田　本来であれば報告書の図面を見て、よくわからなければ現物を見に行く。資料調査として現物を見に行く。ただ今回は見に行くことができないので、研究方法自体を変えて、統計的なことが必要だ、みたいなことですよね。もしコロナがなかったら、アプローチも変わっていましたか。

林　考古学の手法だけだと、コロナでできないことが多いなと思って。他の研究分野の方法を学ぶっていうことがそういえばありましたね。

今思い出しましたが、いろいろ手あたり次第見たりはしました。いろんな研究方法を他の分野から見るっていうのは他の方もやっていたのではないかと思いますのでちょっと聞いてみたいです。

高田　このあたり、武内くん、いかがでしょうか。

武内　やっぱり考古学は現物を見ないとっていう感じだと思いますが、例えば最近3次元のデータ公開とかを博物館などでやっています。それを活用しようとする人が、学部生の中だといるような気がしますね。

考古でも、分布論であればフリーのGISソフトとかもありますし、数値や統計でもフリーソフトや

Excelでも処理できます。そっちのほうが確かに食いつきやすい学生はいるのかなと思います。

高田　統計学は、大学の授業でありますか。

林　私の大学ではありました。ちょうど私の場合は学部の実習でやっていたので、何か統計学というものを学ぶ必要があるんだなぐらいで、4回生で統計学の紹介があったあとで、修士に入って、うわぁやっとけばよかったなっていう感じでした。

統計学の授業自体は、一般教養に入ると思うので、抽選でした。抽選で機会の不平等というか、あまりフェアに受けられる授業でもなかったのかなと思います。

鬼塚　先生が何を重視するかっていうところが大きいかもしれません。考古学の基礎的なところを、例えば実測にしても測量にしても、遺跡の遺物をどう扱うべきかという基礎を徹底して教えたいという意図をかなり明確にしていたなぁというのがあります。

高田　基礎はやっぱり大事ですね。基礎は千本ノックじゃないですけど、ないと発展できないという面がある一方、デジタルリテラシーの基礎も必須なので、そこはバランスでしょうか。

たくさんの報告書がPDFになっています。それを元に林さんが考えている統計的手法って実現できますか？

林　僕の場合は、PDFというファイル形式ならではのというよりは、報告書から読み取れる情報というようなところで研究したので、何かできるっていうとこがわからないですが、例えば、そのPDFっていう電子メディアから何か検索して、ある単語、ある単位とか、そういったものが検索から引っかかって、ページに飛ぶとかそういったことができるとかなり情報収集に役立つのかなとは思います。

武内　報告書PDFの中にある図表の元データをCSVとかExcelの形で遺跡総覧で公開されていれば、もっと研究活動が深まりますか。

林　確かに僕もExcelでデータ管理しているので、そういったCSVにデータを変えたりとか、QGISを使うならGISデータが必要ですね。デジタルデータの基礎知識もですけど、例えばQGISだったら座標値をしっかり入力する必要があったり、いろんな属性を数値で直さないと逆にQGISで使えないとか、そういったことがあります。研究の内容にもかぶってきますが、逆に数値に直せる属性の可能性というか、何がわかるんだろうというところがちょっと深めたい気持ちはあります。逆に数値に置き換えれないものを数値にすることは今の段階では難しいので、何かそういったところで限界も感じたり、逆に可能性があるのかなと思います。

高田　なかなか大事ですね。数値にできないものをどう研究するかっていう観点と、数値にできるものを、大量のデータを数値化して分析するとどういったものができるのかっていう、いろんな手法が考えられますよね。ですので、おそらくこれ、今のPDFでやろうとすると、なかなか実際は作業としてはかなりしんどいのかなっていうのはありますね。

溝口　私は3次元データを研究自体には使っていませんが、いろいろと触るなかで思ったことです。遺物がなかなか見られないっていうような状況になった時に、3次元データが、もちろん肉眼でしっかり見れるほどの精度はないのかもしれませんが、あったらいいなというのは誰しもがおそらく思っていることだと思います。しかし、そういった中で、最近はいろんなところで発掘の報告書の作成にあたり業者とかに委託して遺構や遺物を3次元化して、それをオルソ画像、平面的な画像にして出力したりして報告書になって公開されることがあるかと思います。それもデジタルデータとして公開されるようになり、オルソ画像もいろいろと有用なものですが、3次元データそのものをまず作っているのであればこちらを公開できないのかなと思います。もちろんデータ容量や自治体の対応可否などハードルはあるかと思うんですけど、そのあたりはデータ化が進んでいくなかでひとつ考えるべきところなのではないかなと思います。

高田　オルソにするなら途中の3Dデータがあれば便利ですね。それこそ紙の2次元図面が大前提にな

りますね。手間暇かけて、情報量を落としてオルソにするって、やっぱり紙にしないといけないからそうなっちゃうので、そのまま3Dあれば良いですね。3Dといえば野口さん、どうでしょう。

野口　そうですね。3Dに限らずさっきの統計のこともですが、最初のほうに高田さんがおっしゃったみたいに、まず報告書っていう形式があって、今はオンラインで見ることができてもPDFですよね。報告書は結局紙に印刷をするということが前提だったので、他にも図面に縮尺があるじゃないですか、遺構とか遺物について。例えばA4に収まるようなサイズにするみたいな規定があって、ほんとはデジタルの場合って縮尺いらないんです。もちろんデータサイズの問題はありますけれども、たとえ3Dじゃなくて2Dだったとしても、もっと大きく出せる時代なのに、やっぱりそこに収まってしまっていて、手段は新しくなっているのに方法がそれにアップデートされていない。3Dなんて正にその端的なもので、これは紙に出すという前提にしてしまったら、3Dは捨てるしかないっていうことなので、今お話しされていたことは、正にそのことなのかなって思って聞いていました。

論点：資料管理施設の社会的使命

高田　次は、物や図書など資料の管理施設の社会的使命について考えたいと思います。

さきほど林さんから、資料を保管する施設は開かれていなければならないという発言がありました。

溝口　いろんなデータを公開するっていうところだと思いますが、文化財保護法に文化財は国民的財産とあって、それが埋蔵文化財行政っていうものを支える一つの根拠、これが一番の根拠だと思います。そういうところでデータの公開が現実的にうまくいっていないというのは、やっぱり文化財保護行政そのものの根幹を揺るがすようなものなんじゃないかなとも思っています。情報公開の面で考え方をアップデートしていかないといけないんじゃないかなと思います。

高田　例えば、具体的にどういうところをアップデートしたらいいと思いますか？

溝口　例えば、収蔵庫を開放するとか、デジタルコンテンツの利用とはちょっと違いますが。そもそも誰のものかっていうところです。

高田　皆さん資料調査に行く際にその資料の存在ってどうやって知るのかっていうのが不思議に思っています。報告書もほんとにごく一部の図面や写真しか載っていないのに、何をきっかけに資料を知り資料調査を行っているのかという。そういう意味ではとにかく収蔵庫が開放されて、行って自由に見ることができれば、いろんな閃きとか発見自体あるんじゃないかと。ちょっと脱線ですが、報告書に掲載のない資料を実際はどうやって知るのですか？

林　私の研究が、大珠ということで翡翠製品は自治体でも目玉の遺物みたいなものになってしまいがちだったり、あと遺跡に1個2個とか、そういった貴重な遺物として扱われます。報告書にも結構大々と載っていたりするので、記載されていない遺物を探し出すという点では、ちょっと私は違うのかなとは思いましたので、他の方の意見を聞いてみたいです。

津田　私は瓦の研究をしていて資料を実際見に行かなければならない研究です。その研究が丸瓦・平瓦で、軒先瓦じゃないので、そうなると実際見に行くために集めた資料で出ている図化されたものはごく一部、ほんとに全体の1割2割が図化されて、そのほかは図化されていない状態です。実際行ってみて、実はこんなんあるんだけどって、実は報告していないけどこんなんあるんだよねっていうふうに教えてもらえることがあります。なので、その時々の行き当たりばったりで、瓦を見せてもらうっていう経験が何回かありましたね。

高田　収蔵庫開放するっていうのはオープンな話ですね。やっぱり管理施設については社会的使命としてオープンにしていくっていうのが、まず前提にある。それがクローズになった場合に、不利益を被る層が発生する。今回でいうと、学生の皆さんにやっぱり直撃してしまうということですね。一方、感染

対策も大切なので、そうであるならば、副作用を抑えるために日頃から遺物の3D化や情報公開を進めておくなど、技術で解決できる部分もありうるかなと思いました。

上山　林さんの意見の、開かれていなければいけないっていうところで感じたのが、やっぱり現物の図書館の場合、それこそ利用者の出入りとか紛失・盗難とか、セキュリティー面でどうしても人が常駐しなければいけないってことが現実問題発生してくるのじゃないかなと感じました。その点PDFで上がっているものであれば、サーバーの管理をするSEさんとかは絶対必要になってくると思いますが、常に開放していても何かが起こるリスクっていうのを減らせるので、遺物とかの3D化、遺構の3D化とかも含めて報告書のPDF化も進めていけば、常に開いた状態にすることは可能なのかなというふうに思いました。

高田　特に遺構はそうですよね。遺構は消滅してしまうことが多いので、情報を3Dにしとかないとアクセスできない。

上山　僕も卒論や今も遺構の研究をしていて、やっぱり残らないものです。そのため、どうしても図面と写真とあとは復元のイラスト頼みになってしまう。そこで遺構もある程度3D化されていると、出てきた時の色や状況をより実感できるのかなって思っています。

論点：コロナ禍での資料収集の課題

高田　では、最後の話題です。一番コアの部分で、今回コロナがきっかけではありますけど、資料収集についての課題を改めて確認したいと思います。おそらく、コロナがあるにしろないにしろ、すでに既存で課題になっていた部分があったと思います。例えば、遺跡総覧の場合でも、島根大学とか中国地方の5大学が始めたのは、報告書の収蔵率とかがやはり課題がありました。どうしても首都圏とか関西に対して不利になってしまうことをカバーするために、中国地方5大学で遺跡総覧を始めた背景があります。ただ、今日の話を聞いていると、すべての報告書が電子公開されていないので、完全に解決されているわけではないのかなと思います。これは既存の課題です。

新たに、コロナでそういった課題がより問題として強まった部分もありますし、逆に研究会などについてはオンラインが進んで参加しやすくなったという面もあります。対面の指導とかができなくなったりしたので、ネガティブな部分が出てしまったと、いろいろあると思います。

鬼塚　上山さんの発言を踏まえての話になりますが、どうしても遺物にフォーカスしてやっているなかで、自分が取り扱っている九州の中世須恵器は、実際に自治体が出している報告書に載っているものは、その過程で出てきたものであれば、遺構とどこの層位から出てきたかっていうことと一致しているパターンが多いのですが、中には個人の研究者の方が報告したものだけでしか、その遺物を知りえることができないという状況もありました。それは、とある市で見つかっているのですが、特に整理作業も追いついていない。その報告をされた方も一部をかいつまんででしか報告できていないのです。まともに数値化した資料がそれぐらいしか無かったという状況もあったので、そういう遺構などの情報も残すことで、どこから遺物が出てきたのかっていうところにもやはり発展してくると思います。そういう意味でも遺構の情報というのをしっかりと記録してくださるっていうのは遺物を取り扱う身からしてもありがたいなという状況ですね。

高田　それは、遺構と遺物が素直に紐づかない場合があるということでしょうか。

鬼塚　場合によっては表採資料としてひとくくりにされているところがあります。窯跡でも、そこから見つかった遺物に関して具体的にどの遺構、窯跡のどこからか出てきたのかっていうことについては、記録が残っていないっていう状況もありました。もうかなり昔の話ですので、今更どうこう解決というところには結びつかないかもしれないですが、しっかりとその記録を残した状態にしておく、保存して

おくっていうのが重要な課題だなというふうに思いました。

高田　きちんと事実を記録することは大事ですね。それに加えて、記録自体も残るように記録することが大事。

武内　今回の資料収集の課題があったと思います。その課題をふまえて、逆にその研究対象を変えたりシフトしようということを考えたり、例えば周りの院生や学部生がそういうことをしたのかっていうことをお聞きしたいです。報告書が公開されていない場合や、未報告の資料があったり、博物館や資料館で見せてもらえないっていう状況になった場合、既にいっぱい資料を公開していたり、自治体が3次元データをいっぱい公開しているところに、研究対象をシフトしようっていうのは皆さんや皆さんの周りでいらっしゃらないかなというのは、ちょっとお聞きしたいです。

上山　今のところで、私自身がそうだったなと思いました。そもそも日本の木槨の検出例って全部で40いくか行かないかですけども、その中でも遺跡総覧で報告書があったのがものすごく少なくて、あとはさっきも言ったように地域によって収蔵している報告書に偏りがあるっていうのもあって、私は中国・東アジアのほうにフィールドを変えたっていうか、手に入れやすさで変えたかなって思っています。

武内　やっぱり資料公開したほうが自治体とか研究機関としても、いろいろと研究してくれる人が増えて活性化するのかなって思いました。

高田　資料がたくさん公開されている分野やテーマですね、資料があるテーマと資料がないテーマだと、皆さんどちらを選びやすいですか。

例えば卒論や修論は時間的制限がある。限られた時間でとにかく、ある品質以上のものを書かなきゃいけないという状況で、皆さんだとどう考えますか。

鬼塚　やはり、ある程度公開されて、データがそろっている資料をどうしても選ぶことになると思います。少なくとも、こういうここまである程度踏み込んでいろんな情報が入ってきた今の自分が、もし3回生の段階で卒論をどう考えようかとなったら、たぶんもう少し違う選択していたんじゃないかなと、正直なところそれはあると思います。

高田　それは書きやすい、書きにくいがあとからわかったって感じですか。

鬼塚　はい。当時は先行研究を見てきた感じでは、まだまだ未知なところが残されているっていう情報のもとで、じゃあ自分も書けば、それについて何か書けば自分の実績になるんじゃないかっていう、そういった認識でしかなかったです。しかし、いざやってみるとある程度資料が揃っているという状況がいかに大事かがわかりました。どういう遺物、分布、編年にしてもそうですが、どういった偏向性にしろ規則性にしろ、何がわかるのかということがいかに大事かっていうのを痛感したという状況です。

津田　私自身、研究フィールドが山形県でしたので、どちらかというと変えたっていうよりも、山形県の埋文の報告書は遺跡総覧に全部載っていましたので、コロナ禍でもやりやすい分野だったかなと思います。ある意味PDF公開って表裏一体っていうか、そっちにしか上がってないから変えざるを得なかった人もいれば、逆にそっちに上がっているからこそやりやすかったって人もいるのかなって。私自身はどちらかというとやりやすかったので、いろいろ話を聞いていって、いろいろあるんだなと思いました。

研究論文や雑誌へのアクセス

野口　皆さんにお聞きしたいのが、遺跡総覧が整備され報告書はだいぶ公開されてきたという話しの中で、今日はどちらかというと実物資料とそれを報告する1次文献資料（報告書）の利用の話が結構多かったと思いますが、卒論でも、また修論になるとさらに、研究史、先行研究との比較や、引用というのがどんどん増えてくると思います。そうすると日本考古学の場合って研究論文がオープンアクセスになっていないっていうのがかなり大きいと思うんです。

今はだいぶ落ち着いてきたので、所蔵されているところに行ってコピーすることもできるようになっ

てきていると思いますが、卒論・修論の文献を集めるのが一番大変だったとき、そして今の状況も踏まえて、実物資料とその報告にはアクセスできるようになったけれども、そうでない部分にどんな課題があるのか、または逆に自分がやっているところは意外と公開が進んでいるので大丈夫ですなど、状況をちょっと教えていただければと思います。

上山　僕は、先行研究でPDFがあるわけではない側でした。やっぱり読みたいって思った論文が大体PDFでオープンになっていなかったのでコピーをしたり、現物を購入したりっていうのはありました。でも、ごく稀に博論だったら大学のリポジトリに上がっているのもありました。上がっているものは極わずかでしたし、上がっていなかったところに関しては、すごく手に入れづらい環境ではあったのかなとは思っていました。

林　何が公開していて、何が公開していないかなと考えていたんですけど、やはり学術雑誌、考古学関係はあまり公開していないところが多いのかなというような感じで、特に地方の考古学関係の機関とかが発行している考古学雑誌は公開されていないので、大体閲覧しに行っていました。博物館の研究紀要だったり、日本全国で開催されるような大規模な考古学の学会はそういったリポジトリはありますが、地方の学術誌はないのかなという印象ですね。

高田　そもそも地方誌の雑誌索引は公開されていない場合が多いと思います。どうやって調べていますか？ある論文を読んで、引用の、最後の巻末を見て、芋づる式に探すっていう方法になりますか。

鬼塚　そうですね。それもそうですし、そこに掲載されている遺物や遺跡名から、報告書をもう一度引っ張り出してきて、再度ここに書かれていることが実際どうなのかっていう確認作業とか、そういったこともしているっていう状況でしたね。

高田　論文を見て、もう一度報告書に戻るっていうことでしょうか。

鬼塚　報告書に戻るし、もしくは研究史にかかるところでしたら、引用されている文献に、ここに書かれている引用文献を引っ張り出してきてっていうそういう確認作業を何度か繰り返すということを自分はやっていたという感じですね。

溝口　僕の場合は、資料が閲覧できるような状況になっている場合であれば、とにかく何か自分が見たいものがあるのかっていうのを、その地方の雑誌をひたすら捲りまくるというか、自分が直接アクセスしてみるっていうようなことをしています。インターネット上で確認ということになると、例えば六一書房とかで売っていれば、そこを見て、何が載っているのか目次が載っていればいいなというくらいで、確認しているような気がしますね。

高田　総当たりというか、とにかくがむしゃらパターンですね。昔の僕もひたすら書庫に籠っていました。

学生による未来への提言

高田　未来が大事なので、今後こういうふうになればいいとか、してほしいとか建設的な意見があればお願いしたいです。これまでの課題を見えるようにしたうえで、どう変わっていくかというところが大事なので、建設的にこうなったらいいなっていうのを最後、若者らしい意見を伺えたら嬉しいです。

鬼塚　自分の個人的な意見としては、やはり引き続き、これまでも奈文研の方々もずっと遺跡総覧を更新していただいていますが、もう一押しして自治体などの報告書等をPDF化してほしい、データ化してほしいというのがまずひとつの要望です。もうひとつがやはり追いかけるのが難しい形になると思うのですが、自治体が報告していないけれど、発掘調査が行われていて、その遺物があることはあるが、世間に知られていないものがあるというところです。これは自分を含め大学院生の方々、現在も活躍されている研究者の方々、自治体の職員の方々の課題にもなってくると思いますが、それらを世に出して発表して、図版も含めてそれらを多くの人々に公開できるように発信していくということも必要になってくると、非常に痛感したなという状況です。実際自分も、そういったものに携わっていければいいかな

というふうに考えております。

林　やはり遺跡総覧を使うことが多いので、報告書に限らず、自治体の自治体史の考古編などを載せていただくと、相当な情報量が載っているので、そういったところまで手を伸ばして掲載していただけると、こちらとしては助かるなと思っております。

溝口　遺跡総覧の中で、今公開されていない自治体の報告書を充実していただくというところが、私の中で一番期待しているところです。研究していく中で、瞬間的に気になってちょっと調べてみたことが、その先に繋がっていくということもあるはずだと思います。瞬間的に気になったものをその場ですぐに調べられるとか、1次資料に戻って見ることができるっていうようなことがあれば、今後の研究の進展に繋がっていくんじゃないかなというふうに、私個人としては思っております。

津田　やはり今現状PDFになっていない自治体の報告書をあげていただきたいなというのはひとつあります。同じ自治体の中でPDFが上がっている報告書と上がっていない報告書がある場合があります。有償頒布のものはPDF化になっていなくて、在庫がないものだけPDF化して公開している例が、いくつかの自治体であります。うまくそういった自治体の立場、考えっていうのも奈文研さんに汲み取っていただいたうえで、全部公開していただけるようなシステム作りをしていただくと、この先の考古学をやる子たちにも、それはもちろん有意義なものになっていくと思いますので、そこはひとつ要望として最後にお伝えしたいなと思っております。

上山　私も他の方がおっしゃったのと同様ですが、自治体によって閲覧できるPDFの量にばらつきがあるっていうところが課題かなというふうに思いました。これから出てくる報告書に関しては、比較的簡単だと思いますが、すでに出てしまって、DTPとかがあまり普及していない時代や、そもそもなかった時代の報告書を、どうやってPDF化していくのかというところも課題にはなってきますし、あとはいわゆるOCR化とかがまた課題にはなってくるんじゃないかなというふうに思いました。PDFがすべて公開されると、例えば博物館に行って他の出土の類例はどうなんだろうといった時にも調べやすくなってくるのではないかなと思いました。

武内　僕の研究テーマとしても結構参考になる意見が多くてよかったなと思います。やっぱり、研究しやすい学問じゃないと今後あまり研究者とか院生とか増えないと思うので、そういうところをどうにかよくなってきたらいいですねってことと、コロナ禍で大学を超えた院生間の交流があまりなかったので、こういう座談会があって、皆さん一つ研究のモチベーションにもつながったんじゃないかなと思います。僕は、ちょっとモチベーション上がりましたね。

高田　手短に簡単に総括したいと思います。

コロナでいろんな既存の課題が表に出てきちゃった部分というのはあるとは思います。幸か不幸か、外部要因でどうしようもない部分があるとは個人的には思います。ただ、雨降って地固まるじゃないですけど、これを機により良くするにはどうすればいいかというのは日々考えています。そこはやはり皆さん、今学んでいる学生の皆さんの生の意見を聴きたいということで、今回の座談会を企画しました。実は、個人的には報告書の問題って、枝葉のひとつだと思っています。あくまで手段に関する問題。根本的には本来の発掘の報告とはどんなものなのか、例えば2次元じゃなくて、やっぱり本来3次元じゃないのかとか、そういった部分が本来の幹の話で、PDFが出ている出ていないっていうのは、本来もっと早く終わっておくべき仕事かなとは思っています。島根大学が始めてもう10年以上経っています。現在を生きる私たち全員が社会と未来にどうプラスにしていけるか。今回の意見を参考にしながら、今後のアイデアとして参考にさせていただきたいなと思っています。

野口　質問をふっておきながら停電のためネット接続が切れてしまいました。自治体史や、地方の研究会等の刊行物へのアクセスが課題であることは予想通りでした。自治体史に関しては近年、TRC-

ADEACなどのプラットフォームが整備され、書籍の紙面そのものだけでなく画像、地図、さらに3Dモデルまでマルチメディアでオープンアクセス化が進んでいる状況があります[4)]。また国会図書館では個人向けデジタル化資料送信サービスが2022年5月に開始されました[5)]。こうした環境の変化は、コロナ禍を契機に急速に進んでいると思います。とくに国会図書館の個人向けデジタル化資料送信サービスは、少部数刊行、絶版などアクセス困難資料の利用可能性を大幅に向上させるものになると思います。コロナ禍以前・以後の世代では、考え方・行動だけでなく取り巻く社会的環境自体が大きく変化していることは間違いないでしょう。そうした変化の渦中または変化後の世代がどんどん社会に出ていくと、これまでの体制、状況も変わると思います。少部数刊行、絶版資料などは、それを持っている、見ることができることが、ともすれば「希少価値」とされてきたところもあると思います。いまみなさんが、直面している状況の中でそれを良しとするのかどうか、これまでの体制、状況を主体的に意志をもって変えようという流れになるのではないかと思います。報告書だけでなく研究会誌をはじめさまざまな情報の発信媒体について、オープンにしていくかどうかの判断をする立場にみなさんがなっていく中で、この数年間のできごとも考えながら次の時代を作って行くのではないかなと考えています。

【補註】

1）全国遺跡報告総覧
https://sitereports.nabunken.go.jp/ja

2）CNKI　https://www.cnki.net/

3）CiNii Books　https://ci.nii.ac.jp/books/?l=ja
CiNii Research　https://cir.nii.ac.jp/articles

4）TRC-ADEAC　https://trc-adeac.trc.co.jp/

5）国立国会図書館「2022年2月1日「個人向けデジタル化資料送信サービス」の開始について（令和4年5月19日予定）（付・プレスリリース）」https://www.ndl.go.jp/jp/news/fy2021/220201_01.html